

2023年1月22日（日）主日朝礼拝説教

『天使にも、悪魔にも』井上隆晶牧師
申命記8章1～8節、ルカ福音書4章1～13節

①【この世は神の試験の場である】

イエス様は「聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった」と書かれています。聖霊が満ちるとは、聖霊が人間イエスを完全に支配し、イエス様は神の道具になられたということです。そして荒野の中を“霊”（聖霊）に引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられました。40年はイスラエルが荒野を旅した年数であり、40歳といえば当時では人生が完成する年齢でした。そして「**荒野**」は飢え渴きを覚える場所であり、同時に神と出会う場所でもあり、それは私たちの人生そのものを象徴しています。マルコは「**その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた**」（マルコ1:12）と書いています。人生という荒野には野獣もいますが、天使も共にいます。試練もありますが、助ける人もいるのです。その両者の間で、私たちはどのように生き、どのような人になりたいかを決めなければなりません。誘惑とありますが、それは私たちの本当の姿が露わになるためのものです。悪魔になるか、天使になるかです。イエス様はどのようなメシアになりたいかをここで選択しなければなりませんでした。

●V・フランクルというユダヤ人の精神科医師がいます。彼は第二次世界大戦の時、アウシュビッツ収容所に入れられました。彼は生き延びて、その体験談を本にしましたが、その過酷な環境の中で「人間は悪魔にもなるし、天使にもなれることを知った」と書いています。また彼はこのようにも書いています。「人間の自由というのは、諸条件からの自由ではなくて、これら諸条件に対して、自分のあり方を決めてゆく自由である。」

自分の置かれた悪い条件と闘って、良い条件に変えてゆくことも大切でしょう。しかしそれができない時に、それらの条件に対して自分がどのように生きるかが求められています。悪魔や獣のようになって恨みをもって生きるか、それとも天使や人間として感謝して生きるかが問われています。

②【三つの誘惑】

イエス様は四十日間、断食し空腹になると、悪魔がやってきて三つの誘惑をしました。

（1）最初、悪魔はイエス様に空腹だったら石をパンに変えろといいますが。しかし主は「**人はパンだけで生きるものではない。**」（4節）といわれました。これは申命記8:3からの引用です。人間の最大の悩みは「食べていけるか、つまり生きれるか」ということです。人々の食糧問題を解決したらお前はメシアとして認められるぞといったのです。仕事をくれる人、食べさせてくれる人に人は従います。

牧師の世界でも同じです。神学校が人事を握り、教会を^{あっせん}斡旋します。牧師たちは食べてゆくために神学校の人事にへつらい、派閥を作ります。口では神に生かしてもらおうと言いながら、実際は人に生かしてもらっています。

(2) 次に悪魔はイエス様を非常に高い山に連れて行き、世の繁栄を一瞬に見せ、自分を礼拝するならこれをすべて与えると嘘をいいます。つまり悪と妥協し権力と富と地位を得れば、人はお前を尊敬し、お前に従い、お前はメシアになれるぞというのです。やはり人間は目から入る大きくて立派で確かそうなものに心が奪われます。しかし主は「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」(8節)と答えられました。これも申命記6:13からの引用です。

(3) 最後に悪魔はイエス様を神殿の屋根の上に立たせ、飛び降りて奇跡を行って見せると、そうすれば人々はお前をメシアとして認めるぞといいます。神を自分のいうがままに動かし、利用させようとしているのです。まるで幼い子供が、親にわがままをいって自分の思いを通そうとするようなものです。しかも悪魔は聖書から御言葉を引用しました。「主はあなたのために、御使いに命じて、あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。彼らはあなたをその手にのせて運び、足が石に当たらないように守る」(詩編91:11)しかし主は「あなたの神である主を試してはならない」(12節)と答えられました。これも申命記6:16からの引用です。

●妻を病で亡くされたある兄弟が「聖書に、病人に手を置けば治る(マルコ16:18)と書いてあるのに、治らなかった。だから私は聖書を信じないし、読まないことにした。」と言っておられました。でもこれは、神の御心なら治るのであって、私たちの思い通りになるのとは違います。病気が治るのが一番良いかどうか分かりません。元気になればもっと罪を犯すかもしれないのです。ユダの王ヒゼキヤは主の目にかなう正しい王でしたが、死の病にかかりました。しかし神に癒しを求めると病が癒され、寿命が15年与えられました。しかしこの後、彼は高慢になり、神の言葉を聞かない人になりました。「ヒゼキヤは受けた恩恵にふさわしくこたえず、思い上がり、自分とユダ、エルサレムの上に怒りを招いた。」(歴代誌下32:25)何が幸いであるかは分かりません。神の御心になることを求めなければなりません。

③【神の愛を知った人間として生きる事】

悪魔はけっしてメシアになることをやめさせようとしたのではなく、苦難のない栄光のメシアにならせようとしたのです。経済問題を解決し、奇跡を行い、この世の権力を持つ強い、栄光のメシアとして人々を救えと悪魔はいうのです。エデンの園で悪魔がアダムに「神のようになれる」(創世記3:5)と誘惑したのと同じです。ここでも「神の子なら～をしてみろ」と悪魔はイエス様に言います。それは十字架の場面でもそうでした。「神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りてこい。」(マタイ27:40)悪魔は神の愛を疑わせようとしているのです。

しかしイエス様はいつも神様の愛を信じ、神の御心を求め、それに従いました。人々の飢えをパンで満たし、いくつかの病も癒しましたが、それは父なる神様の許可された範囲内でした。その宣教活動の後半では一切、奇跡を行いませんでした。

●ヘンリー・ナウエンはこうっています。

イエスの最初の誘惑は、自分の能力を示すことにありました。…私たち司祭や牧師は、人々を助け、空腹の者に食べさせ、飢えて死にそうになっている者を救うために召されたのではないのでしょうか。…主の務めに携わる者が経験するおもな悩みの一つは、自己評価の低さに苦しむという事です。今日、多くの司祭や牧師が、人々にほとんど感化を与えることのできない自分に気づき、悩んでいます。…心理学者、精神療法士、結婚カウンセラー、医師のほうが自分より信頼されているように思えます。

私は牧師になって33年、いつもこの誘惑を受けてきました。私が奇跡を行い、病気を癒し、苦しむ多くの人の必要を満たし、立派な大きな聖堂と権威と地位を得れば、人々はキリスト教を認め、信じてくれるだろうと思ってしまうのです。でもそれは本当は「自分を認めてほしい、自分を称賛してほしい」という欲望から出て来た思いなのだと思います。

●ハヤット神父さんが始めた「心のともしび」という季刊誌があり、それを読んでいたら、片柳弘史^{ひろし}神父がこんなことを書いていました。「共に生きるという意味で、共生という言葉がよく使われるが、実際にこの世界で目にするのは競争である場合が多い。どうしたら競争をやめ、共生を実現できるのだろうか。競争が生まれる一つの原因は、何かを手に入れることが幸せだという考え方だろう。地位や財産、名誉などを手に入れることが幸せだと思っからこそ、それらを巡って争いが生まれる。だか私たちの幸せは何かを手に入れる事の中にはない。…『私たちは競い合うために生まれて来たものではありません。愛し合うために生まれてきたのです』とマザー・テレサは言った。愛し合うために生まれて来た人間は、愛し合わない限り幸せになれないとも言えるだろう。」

ペトロに、復活したイエス様が求められたのは「あなたは私を愛するか」だけでした。あなたがどれだけのことを成し遂げたか、どれだけの人があなたを重要な人と認めたかではなく「あなたは私の愛を知っているか、私を愛しているか」だけでした。ナウエンは「自分が一切の条件なしに、限りなく愛されていることを知っている人は、本当に少ない。」とっています。

人が名声を求め、成功者になろうとするのは、愛を知らず、愛で満たされていないからです。愛で満たされている人は、人からの名声を求めず、成功するかどうかにこだわりません。もう満ちているからです。神がどれだけ豊かな愛で、私たちを愛されたかを知りましょう。神の愛だけが私たちを自由にし、愛し合う喜びに生きる者とさせてくれるのです。